

歌誌 黄雞「冬号」投稿歌

山形 黒沼 貞志

歌題 虫時雨

挿し芽からふたとせ経ちて花を見て吾子を育てし昔憶えり

人知れず可憐に咲き居る姫さゆり木漏れ日受けて初夏を彩る

山路の片方に咲きし谷うつぎ背の深緑に色の際立つ

妻は薔薇食思の我はミニトマト庭を分け合い初夏を楽しむ

さり気なく薔薇の切り花食卓に育てし妻の胸裏醸せり

薔薇園の三重のアーチの真中に妻を配して一写入魂

家中にカサブランカの香り充つ鼻腔で味わう初夏の訪れ

草花が初夏を迎えて人を待つ英国風のガーデン爽やか

夏の夜の花火大会懐かしき時も流れて棧敷席有り

虫時雨賑わう暮れ方処暑の日の蝸・蟋蟀・鈴虫の宴

秋冷の霧が降りたる市街地を眼下に配す静黙の里山しじま

嗚呼朋よ祝いの帰りの機内にて逝きし無念を黄泉で語らん

「いつ捨てる」妻に問われし写真群部屋に飾って四季のミニギャラリー

地方紙に掲載されし我が活動「見たよ」の反応継続の糧

改革の文字を付けけれど何事も施策は陳腐曇れるメッキ

十首選

山形 黒沼 貞志

籠りいし家をいづれば風光り既に早苗田白

雲映す 船越 京子

七夕の願ひささやかにしてマスクせず友ら

とおしゃべり心ゆくまで 三浦 弥生

拉致されし娘の消息知れずして絶えて待て

ども逝く父あはれ 宮沢 勝男

はつ夏となるも重たき日々にして今朝はう

れしきカッコウのこゑ 打越 勝子

庭花の咲くも気づかずこもりしも初夏を知

らせる姫うつぎ咲く 山口 園枝

馬鈴薯の花が咲きをり何ごともなかったや

うに青空の下 秋保 嘉子

この国はファッションマスクになり果てつ

若きら香港のマスクは重き 浅井真紀子

ふり返りふり返りして散るさくら兄の写真

の七つのボタン 石塚 満

昭和十七年改正の予科練の制服は桜

と錨が描かれた七つボタンとか。写真

の背景は散る桜なのだろう。リフレイ

ンが効果的。社会詠の十首選とした。

外つ国よりコロナウイルス春一番どこ吹く

風と白鳥帰る

伊藤 静子

交遊の無き生活を受け入れて夏至のひと日

を猫そばに居る

伊藤 良子